



コラム

Vol.36

日本のIT事情

情報の周辺・周辺の情報 (7)

朝日新聞虚偽報道と 電子メールの 危うさについて

矢野直明

サイバーリテラシー研究所 (明治大学客員教授)
yano@cyber-literacy.com

かつて新聞の雄を自認し、ジャーナリズムの担い手たらんとも自負してきた朝日新聞が揺れている。

8月21日付朝刊2面と翌22日付の3面で、新党結成をめぐる「亀井静香・田中康夫両氏が長野県内で会った」とする記事を掲載したが、その記事は長野総局員の虚偽メモに基づくものだった。9月15日付同紙はこの「虚偽メモ問題」の検証記事を全3ページにわたって掲載した。また10月1日付紙面では、今年1月12日付紙面で報じたNHKの特集番組をめぐる「政治介入」問題をめぐって、第三者機関の最終報告記事を全2ページにわたって掲載している。特集のタイトルは両者とも「信頼される報道のために」。

虚偽報道が明るみに出た直後、同社は東京編集局長らを更迭、箱島信一前社長は相談役とともに日本新聞協会会長を辞任すると表明した。10月1日付紙面では、東京編集局長を兼務していた編集担当の更迭も報じている。

報道の信頼性も、新聞社の組織もまた大きく揺らいでいるが、これは、一面においては、「総メディア社会」における日本、いや世界全体のマスメディアの変容という大きな枠組みのもとに考えるべき問題である。他面においては、朝日新聞社の長年にわたる組織的病根が噴出した事件でもあろう。ここでは、虚偽報道事件に関してのみ、気づいたことを書きつけておきたい。

電子メール恐るべし

会いもしない政治家に話を聞いたという虚偽のメモがつくられ、それに基づいた記事が掲載されるという、ジャーナリズムの根幹を揺るがすような事件はなぜ起こったのか。同社の検証記事は「メールだけのやりとり」に終わり、取材現場での言葉によるコミュニケーション不足が虚報につながった最大の原因だと思えます(「検証を終えて」)と結論づけている。

私は、記事を読んだ直後にブログで「メディアとディスコミュニケーション」¹⁾と題して、大略以下のような感想を書いた。

検証記事によると、亀井・田中両氏が会ったとの情報

を確かめてくれとの本社政治部から長野総局への連絡は18日午後、メールで行われ、総局長からこのメールを転送された長野総局員は、とくに急ぎの用件とも、たいしたニュースとも思わず、ルーティンの仕事を優先した。夜勤業務で忙しかった20日夜、総局長に「例の件はどうだったか」と口頭で聞かれ、田中知事に直接確認していないのに、「知事は亀井氏に会ったと言っていました」とうその返答をする。「それをメモして政治部に送ってくれ」と言われ、「会ったとの裏はほとんど政治部でとれているのだろう」と軽く考え、10分くらいで田中知事との一問一答方式のメモをでっち上げた。それを政治部に送ると同時に総局長にコピーを送った。

この情報に飛びつき、電話で「メモ内容を使っているか」と問い合わせた政治部に、総局長は了解の返事をしている。翌日、勤務についた総局次長(デスク)にこの間の引継ぎは行われておらず、夕方、政治部からメモ使用の了解を再度求められたデスクは、メモの存在を知らないままに、すでに話がついていると思って了解した。原稿の大刷り(最終ゲラ)がファクスで総局に届いたのは午後9時半、総局員は驚くが「頭が真っ白」になって、もはや虚偽メモだと自白する勇気がなく、成り行きにまかせる。その結果、誤報記事が掲載された。

問題は、電子メールの便利さの裏にある「軽さ」である。

このメモが紙に書かれ、総局員に手渡されたら、そこでメモ内容をめぐる何らかの会話が行われたのは間違いない。またメモが紙で書かれてデスク机に釘でもとめてあれば、デスクはごく自然にこのメモに目を通しただろう。総局員は送られてきたゲラを見て初めて、この重大さに気づく。ファクスで送られてきたコピーではあっても、やはり紙に印字されたゲラには「威力」があったということである。電子メールと紙に印刷された大刷りとの存在感の相違。電子メールの持つ「危うさ」を感じざるを得ない。

これについてはいくつかのコメントやトラックバックが寄せられた。そこに共通していたのは、電子メールを悪者にしてしまい、というのはおかしい、病根はもっと深いところにあるのではないかという、至極まっとう



な意見で、もちろんこのことに私も異論はない。

電子メールにも問題があるとして、それではどうしたらいいかについては、当然、2つの考え方がある。第1は、デジタル技術に対するリテラシー教育を徹底すべきだというもの。電子メールをより上手に使いこなせば、現在のようなディスコミュニケーションは克服できるだろうという意見だ。第2は、紙による伝達など従来の方法の長所を再確認し、より多角的コミュニケーションを図るべきだという意見である。

私はその両者ともに必要だと考えているが、ここでとくに注意したいのは、前回のコラム「事故車に乗り合わせた2人の運転士はなぜ早々と現場を離れたか」とも関連するが、電子メールという道具が持つ特性である^{☆1}。この点について私は再度、「電子メールは、たとえば言えば用水路」と題するコメントを書いた。

電子メールは、たとえば言えば用水路

コミュニケーションの道具としての電子メールは、たとえば用水路である。山から海へ、田畑から河へ、効率的に水を流すためには便利だが、かつての小川が持っていた他の生物との共存、周辺環境との調和、のどかな流れは失われる。

たとえば長野総局にファクスで紙の行政（取材お願い）が送られてきたら、総局長はそれを直接、総局員に「手渡す」だろう。そこで政治部の意向や上司としての指示がごく自然に伝えられる。「そうすべきだ」とか「ルールでそう定められている」とかいうことではなく、ごく自然なコミュニケーションとしてそうなるはずだ。

総局員が書いたメモも、それが紙だったら、総局長に手渡されるとき、両者の間でもう少し突っ込んだ議論があったと考えられる。「田中知事、意外としゃべってるじゃないか」、「ええ、まあ」、「軽井沢のどこで会ったの？ ほかに立ち会った人はだれ？」、「??」。総局員の態度や応答のどこかに歯切れの悪さが出て、ベテラン記者たる総局長がメモでっ上げを見抜くのは、たぶん、いとも簡単だっただろう。

あるいは政治部記者が記事をまとめるにあたって、総局員からもっと掘り下げたデータをほしいと、電話で彼と話して「ちょっと本社に上がってくれ」と上京させれば、化けの皮がはがれるのは、これまた火を見るよりも明らかだったと思われる。

実際、かつての取材活動はそんなふうに行われていた。総局（かつての支局）は日々のささいな、どちらかとい

うと無駄に見えるような、ふれあいの中で新米記者を育てたのである。また総局員は、ときに憧れである本社に「上がる」機会を得て、そこで取材の仕方や記事の書き方を教わった。終われば、「よく来た」と先輩から酒をふるまわれ、その日は都内のホテルでぐっすり眠って、翌朝、自分も一役かった記事が大きく掲載された朝刊を何度も何度も読み、カバンに大事にしまって、はればれと総局に帰っていった。若い記者たちはこうして、記者としての喜びや誇り、技能や責任を学んでいった。

便利な道具を使うリテラシーを身につけるのは重要だが、そのリテラシーには、道具を上手に使いこなすだけではなく、その性格を見抜いて、賢く使う知恵が含まれる。だから当然、作業の効率化のためにすべてを電子化すればいいということではない。紙の長所を見直すことも重要だろうし、紙から電子へ移るときに陥りやすい危険を把握しておくことも大切だ。

何もかもをデジタル技術で代用しようとするのは、コンクリート製用水路をどんどん作って、雨水を一気に海に流してしまうのに似ている。かつて小川が生息し、雑草が生い茂り、周辺をトンボが舞い、豊かな自然が息づいていた小川が消えたように、いまジャーナリズムの根幹が危機に瀕していると言えるだろう。

朝日新聞社ではここ数年、小川をつぶし、用水路をつくるような作業が強力に進められてきたという。私の在社当時からすでにそうだったが、「普通会社」並みに無駄をはぶきたいという姿勢が強く、それがジャーナリズムをいかに窒息させるかに無頓着だった。厳しい経営環境という背景があるにしろ、たらいの水といっしょに赤子も流してしまっただけでは元も子もない。

何度も言うようだが、デジタル技術が現実世界のさまざまな制約をぶち破るとき、その制約ゆえに築き上げられていた従来の習慣やルール、自ずからなる秩序もまた失われがちである。私は現実空間とは違うサイバー空間の構造や特性を理解することが、これからは重要と考え、サイバー空間の特性を「サイバーリテラシー3原則」²⁾にまとめている。その第1の特性として、「サイバー空間には制約がない」をあげているが、この制約のなさ、換言すれば、これまでの制約をぶち破ったデジタル情報の便利さが、かえって私たちが長年培ってきた知恵を一気に無効にしてしまう事実を忘れるべきではない。

参考文献

- 1) <http://www.cyber-literacy.com/blog/>
- 2) 矢野直明：サイバー生活手帖—ネットの知恵と情報倫理、日本評論社（2005）。
サイバーリテラシー説明記事：<http://www.cyber-literacy.com/ja/principle/index.htm>

（平成17年10月4日受付）

☆1 このコラムについても、技術者の読者から「技術を賢く使う社会全体のリテラシーが大切だ」とのメールをいただいた。